



令和5年度 幼児教育研修（資質向上 加藤ゼミ 第2回）

「心の育ちと対話する保育実践」

日時：令和5年9月14日（木）15：00～17：00

会場：足立区梅田地域学習センター

講師：山梨大学 名誉教授 加藤 繁美 氏

加藤ゼミ2回目に向け、研修生が園で心動かされた事実を「シナリオ型実践記録」としてもちより、前回学んだ「分析」のポイントを意識しながら、グループで検討しました。

書き留めるとは

自分の感性で受け止めるということ。
保育を見つめなければ書けないことである。



自分が**一番大事にしているもの**が
書けているか？



実践記録 I

～R君と子どもたちの関わりの記録～

『どうしてあげるといいのかな・・・？』（4歳児）

ある日のごっこコーナーにて。

「いれて」と大きな声で伝えるR君に対し、女兒たちは誰も何も言わずに遊び続ける。
R君は怒る素振りを見せず、同じ場所で遊び始める。



しばらくすると、R君とKさんがバンダナをめぐる、「使ってた!」「使ってなかった!」と取り合いになる。
Kさんは「R君はごっこ遊びに入っていなかった!」と主張。

怒ったR君は手が出してしまった。



「Kちゃん泣いているよ」「ダメだよ」とR君を責めるように言う子どもたちに対し、

『R君だけが悪いわけじゃない!』
「入ってなかった!っていうけど、入れてって言っていたR君のこと、みんな知らんぷりしてたよ。」

R君は、叱られると思っていたので、保育者の言葉にびっくりした表情をしていた。

分析のポイント

大事な場面はどこか？



『R君だけが悪いわけじゃない!』と言い切った保育者に、いつも手が出てしまい叱られることの多いK君にとっては**意外な人生の経験**をした場面。

クラスの子どもたちとR君の関わり方を分析し、今後の保育へつながっていく記録である。R君が遊んでいる中に、他児が魅力を感じ仲間に入れる保育をしていけるとよい。

タイトルを『R君だけが悪いわけじゃない!』にすると良い。

実践記録 2

～2歳児の子ども同士の共感が作られる瞬間の記録～
『日常のかわいらしいコマでの変化』（2歳児）

ある夏の日中、保育室で自由遊びをしていた。
K児はいつものようにM保育者のそばにおり、ままごとで遊んでいる。
そこへU児が登場。U児は遊びが幼く、友達の遊んでいる場を壊してしまうことが多い。

U児：「Kちゃん！ Kちゃん！」
ちょっとたどたどしい言葉づかいでU児がK児を呼ぶ。

U児はそれまでM保育者の前ではK児の名前を発語していたが、K児本人の前で発語するのは初めてであった。

その瞬間、K児はU児を優しく抱き寄せ愛おしそうに抱きしめている。U児も嬉しそうな表情である。

この出来事をきっかけにK児とU児は時々一緒に遊ぶようになった。



分析のポイント

記録の書き方について

文字だけで読むとき、読み手の想像が入る。

下線部のように、**記録の中に解説が入っていると、子どもたちのやりとりの場面がかき消されてしまうことがある。保育者の心の声はカッコ書きにしてもよい。**

読む人に丁寧に伝えることに対して、書き言葉で伝えることの難しさがある。



実践記録 3

～月齢の差が表れる記録～
『保育園ごっこ』（3歳児）

ままごとコーナーでK児、I児、N児（女児3名）が先生役になり保育園ごっこをしている。
そこへR児（男児）がブロックで作った剣を片手に入ってくる。
R：「いーれーてー」と聞いている。しかし、3人に「ダメ」と断られてしまう。



別の女児がやって来て「入れて」というと、3人はそろって「いいよ」という。
そのやりとりを聞いていたR児は、剣を振りかざしたり蹴ろうとするなどの行動で気持ちを表している。



保育者が「どうしたの？」と介入する。

R：「どうしてだめなの？」

N：「だって、保育園に男の先生いないもん」

と言った後、すぐに思いついた様子で

N：「あっ、〇〇先生」（夏季アルバイトの男性保育者の名前を言う）



分析のポイント

発達がわかる記録

実践記録1と相反する記録である。

大人は、平等にしたいという思いが先にあり、みんな仲良く遊んでほしいと願う。

一言で3歳児と言っても、月齢による違いは出てくる。

「男の先生いないもん」と理由づけする姿が、3歳児の賢さと言える。

自分の倫理にこだわる、子どもの律儀な所が表れている記録である。



研修生の報告書より

先生から「このレポートで大事なところはどこですか？」と質問があり、とても考える時間になった。日誌においてもどこが大事で自分は記入しているのかと考えるきっかけになった。

会話のやりとり、行動を時系列に書きおこすことで、読み返した時に遊びの本質、子どもの気持ち（考え）、保育者の気持ち（願いや疑問）に気付き、見つめ直すことができる気がした。